

招聘 研究員

氏名 蘭 曉敏 (LAN Xiaomin)
所属機関等 華東師範大学 対外漢語学院 博士課程
受入期間 2015年9月27日～2015年10月17日
指導教員 鈴木 陽一 (チューター: 王 子成)
研究課題 “鼓”が関わる戯曲の比較研究
—中国山西「襄垣鼓書」と日本の狂言を例に



中国と日本の地方伝統芸能の 厳しい生存環境に関する調査報告

蘭 曉敏

各国の優れた地方伝統芸能は、無形文化財保護という大きな文脈においては注目、重視されているが、社会の発展と人々のライフスタイルの変化により、保護の取り組みは想像以上の困難と障害に直面している。

無形文化財は古い伝統文化というばかりでなく、民族の文化の精髓であり、歴史の大河のように古来より脈々と続いてきたものである。その大河の中にある様々な種類の魚はそれぞれ独自の文化を表している。演芸・大衆芸能という範囲に絞ってみればその小さな魚の一つ一つが地方伝統芸能を代表するものであり、長い時間をかけて発展し変化してきた。しかし今ではその自然環境や生態環境がともに変化し、川が干上がったたり河川が汚染されたところもあれば、流れがせき止められたりして人の手で自然が改造されたところもある。その結果、川の中で生きる小さな魚たちはどのような運命に直面するのだろうか。

ある魚は時代の歩みにぴったりと寄り添い、自身の形態を不断に変えながら社会に適合することで新しい環境の中で大きくなり、自分の居場所を見つけているものもある。また別の魚は時代の変化についていけず、とりわけ都市化に上手く適応できず今まさに生存の危機に直面しているものもある。さらには、社会と全く相いれることができず時代に淘汰され、既にあるいは間もなく消滅してしまうものもあるだろう。

以上、魚にたとえた理論はまさに現在の地方伝統芸能の生存環境の厳しさをリアルに示すものである。中国は演芸・大衆芸能大国である。伝統芸能は各地に広く分布し、長い歴史があるだけでなく種類も豊富で、それを支

える大衆の基盤も厚く芸術的価値も高い。しかしかつて人気を博した地方大衆芸能の多くは今や活気をなくし人々の視界からも徐々に消えつつある。初めて「中国曲芸名城 (中国演芸・大衆芸能の町)」に選ばれた山西省長治市の地方伝統芸能も、消滅の危機に直面していることがフィールドワークを通じて分かった。中国の国家無形文化財に登録されているこの地の代表的な芸能「襄垣鼓書 (鼓書: 太鼓などの演奏とともに歌を中心とした芸)」を例に述べる。

襄垣鼓書は明朝末から清朝初期に誕生した、山西省では広く伝わる襄垣県の地方大衆芸能であり、300年の歴史を有する¹⁾。曲調の種類として「鼓児詞」、「小板書」、「八角鼓」などがあり、旧社会においては演者である芸人の多くは視覚障害者であった。芸とともに八卦占いもでき、「三皇会」という組織のメンバーとして「三皇聖母」を信奉していた。毎年旧暦の5月5日に「皇会」を開催し、達人を目指して歌や芸を披露し競い合っていた。新中国成立後になると、歌の形式や節回しの改良を行い、曲調は以前より豊富になり技芸も大きく向上した。演者は一人で小鼓 (小太鼓)、鈸 (シンバルのようなもの)、小鑼 (小型のどら)、大鑼 (大型のどら)、梆 (棒状・筒状の拍子木)、板 (カスターネット状の拍子木) などの七つの楽器を自在に操る²⁾。初期の「鼓児詞」の上演は、書鼓 (太鼓) を背の低い木の支えの上に置き、歌い手は板 (拍子木) と鼓箭 (太鼓のばち) で調子を取り、もう一人が老胡や二胡で伴奏するスタイルであった。台本は長篇、中篇、小段の三種類である。襄垣鼓書の上演は人々の生活と関連しており、通常は縁日で行われるほか、地元の村



人の家で誕生祝いや子供の満一か月祝い、新居祝いなど冠婚葬祭の場合は鼓書芸人を呼んで上演をした。

2009年には、その独特な芸術表現の風格が一地方の伝統芸能を代表する中国の鼓書芸能の一つの代名詞であるとして、国家無形文化財に登録された。襄垣鼓書の独特な魅力は主に以下五つの点にある。

一、芸人を構成する特殊なグループ：視覚障害者

演者である芸人は主に視覚障害者からなり、生活が不自由なため芸で生計を立てている。唯一の国家級の襄垣鼓書伝承人として選ばれた王俊川老人も目が不自由であるし、襄垣鼓書芸能団の団長を務める李杞氏もそうである。目が不自由な芸人による技芸であることから、観客は伝統芸能を鑑賞するのみならず、彼らの体から伝わってくるポジティブで楽観的な精神に感銘を受けるのかもしれない。

二、芸人が入門する際に学ぶ特技：八卦占い

襄垣鼓書の芸人がまず習得するのは八卦占いである。現在の易者のような身分を得て衣食住を確保した上で初めて鼓書の芸を学ぶのである。襄垣鼓書の伝承者として三年の修行で一人前になれるとした場合、少なくとも八卦占いの習得に一年はかかる。

三、芸人達の民間信仰：三皇会のメンバー

襄垣鼓書の芸人達は自らの信仰を持ち、「三皇会」のメンバーとして「三皇聖母」を信奉している。三皇とはすなわち天皇・軒轅、地皇・神農、人皇・伏羲であり、聖母とはすなわち女媧である。毎年旧暦5月5日に「皇会」を開催し芸人達が芸を競い合う。

四、芸人達の卓越した技芸： 手と足を駆使して一人で七種の楽器を扱う

芸のスタイルは一人での弾き語りである。小鼓、鉦、小鑼、大鑼、柳、板などの七種の楽器を一人で操り、両足には鼓錘（太鼓のばち）がくくりつけられ、手と足を使って同時に演奏する。

五、花柳界の調べ「鶯歌柳」

襄垣鼓書の「鶯歌柳」（曲調の種類）は清朝・雍正帝の時代に流行したもので、花柳界の歌と地元の民謡小唄が融合したものである。かつては娼妓が客に歌って聞かせていたもので、娼妓の収入では足りない時に外に行き上演することもあった。それを男性が習得して弾き語りの曲となったもので、その曲調が「鶯歌柳」と呼ばれる。

このように独特な風格を持つ地方伝統芸能だが、収入が少ないことから若者が学びたがらず、今や歌い手の芸



●写真1 視覚障害者である演者による襄垣鼓書の上演
撮影日時：2015年8月19日 20:33 / 撮影場所：中国山西省長治市襄垣県大黒溝 / 撮影者：蘭曉敏



●写真2 襄垣鼓書の国家級伝承人、王俊川氏
撮影日時：2015年8月20日 16:42 / 撮影場所：中国山西省長治市襄垣県王俊川氏宅 / 撮影者：蘭曉敏



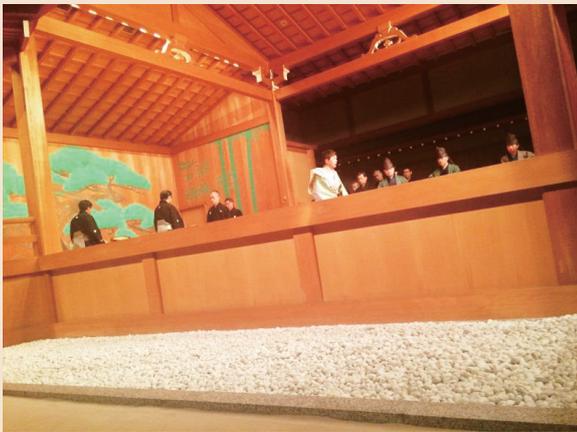
●写真3 襄垣鼓書の演者が使用する楽器
撮影日時：2015年8月19日 9:15 / 撮影場所：中国山西省長治市襄垣県非物質文化遺産体験館 / 撮影者：蘭曉敏





●写真4 日本横浜三溪園の琵琶演奏会にて奏者が演奏する様子

撮影日時：2015年9月29日 19:07／撮影場所：日本横浜三溪園
／撮影者：蘭暁敏



●写真5 日本東京国立能楽堂にて演者が上演を行う様子

撮影日時：2015年10月4日 13:37／撮影場所：日本東京国立能楽堂
／撮影者：蘭暁敏

人は30人に満たない。筆者が調査したところ、芸能団に所属するある夫婦の場合、子供も視覚障害者だがその子には技芸を継がせたくないとのことだった。人材の端境期を迎えていることが裏垣鼓書が直面する最大の問題である。フィールドワークの中で筆者は幸い現地の大黒溝で鼓書の上演を見ることができたが、観客の多くは年配者であった。こうしたことから分かるように、裏垣鼓書はもはや現代人の鑑賞に堪えることができず多くの大衆の支持を失ってしまったのかもしれない。

日本の地方伝統芸能も独特の風格があり、中国の裏垣鼓書とジャンルとしてもっとも似ているのは「安城の三河万歳」であろう。この芸能も日本の国指定重要無形民俗文化財となっている。三河万歳は「神道三河万歳」、「三河御殿万歳」、「三曲万歳」の三つの演目よりなる。筆者は安城市歴史博物館に行き、映像資料で三河御殿万歳を鑑賞した。舞台の背景は松の木を主としている。中央の主となる歌手（太夫）が手に扇を持ち、左右にそれぞれ三人いる伴奏者（才蔵）は皆手に鼓を持ち、台詞

あり歌ありの表現形式は動きがそろっていてリズム感があった。

日本の琵琶演奏もまた独特の風格がある。一人での弾き語りもあれば、二人組で一人が琵琶を弾き、もう一人が舞踊をするものもある。また、一人が琴、一人が琵琶、もう一人が舞踊、と三人で演じるものもある。日本の琵琶の弾き方は、中国とは違って演奏者は指で弾かず三角形の木の板（ばち）を使って弾く。

また、筆者が日本で調査に訪れた浅草演芸ホールでは、落語、相撲漫談、講談、漫才、俗曲、歌謡漫談など多彩なスタイルの演目があり、演者はみな表情豊かに大げさな身振り手振りを加え、娯楽を中心とした観客の笑いを誘う内容であった。基本的にはどれも一人で演じており、落語は語りを主としたもの、俗曲は語り・歌もあれば踊りもある。漫談は演者がスーツを着て舞台上で語り、一方講談では演者は小さな机（釈台）の前に座り、語りが大事な場面になると細長い木の板（張り扇）で机をたたき観客の注意を引きつけるのであった。

日本の伝統芸能も多様なスタイルがあり、内容も豊富である。筆者は横浜三溪園の琵琶演奏会、東京の国立能楽堂、浅草演芸ホールなど伝統芸能の上演場所も調査したが、どこも観客はちらほらとしかおらず、また年配者が多数を占めており、これら日本の伝統芸能も若者達の注目や人気を得るには至っていないことが見受けられた。中国の地方伝統芸能が直面している苦境は日本でも同様なであろう。

こうしたことから分かるように、中国であれ日本であれ、今の時代は伝統芸能にとって楽観視できる前途ではなく、伝承者の深刻な高齢化・弟子不足・大衆の支持の弱まりといった問題が、かつて我々の生活に大きな影響を与えてきた貴重な無形文化財の継承を難しくしているのである。

伝統芸能の保護においては、民族の魂を再び形づくるべく保護の意識を高めなければならない。伝統文化の表現の主体は大衆であり、それと同時に伝統文化もまた人々を形づくる役割を持ち、特色をもつ行事は人を通じて体現させるものである。しかし今の時代、都市化による影響も極めて深刻であり、大衆に根付いてきたものを覆すまでになっている。社会の側面だけでなく心理的な面からも、大衆の思想や意識は人々の行動に深い影響を与えている。

各種の伝統芸能はそれが存在する文化的空間を持ち、千差万別で多種多様な大衆芸能文化は深さとともに広がりを持ち、また自らが持つ各種の不確定性もある。外部環境が変化するにつれ伝統芸能自身もまた絶えず変化し、我々はマクロとミクロを兼ね合わせた視点でこれら大衆芸能という無形文化財を見つめることで、さらに生



き生きとした形で発展させることができるのではないか。

地方伝統芸能が直面している様々な問題は我々に警鐘を鳴らしている。時間との勝負、生命との勝負、都市化プロセスとの勝負だということが無形文化財保護における第一のスローガンとなるべきであろう。一時的な対応にせよ保護を行わなければ、それらは我々の生活から音もなくひっそりと消え去り永久に失われてしまうかもしれない。だからこそ、大衆芸能という無形文化財の保護には理性的な思考が必要であり、それらが発展していくための客観的法則を尊重し、かつ生き生きとした形で我々の生活の中に取り入れていけるよう手を尽くし、末永く伝承していけるようにしなければならない。我々が

何よりも優先すべきは全面的かつ系統立った収集とありのままの記録に尽力することである。その上でそれら地方伝統芸能を歴史の絵巻に書き加え、我々の子孫が過去の大衆の生きざまや生活スタイルをより全面的に理解できるようにし、真実の記憶、恒久的な記憶に留めていくことだと筆者は考えるのである。

【注】

- 1) 王徳昌：「襄垣鼓書精品匯集」、政協襄垣県委員会文史委、襄垣県文化服務中心出版。
- 2) 山西省襄垣県志編纂委員会：「襄垣県志」、北京：海潮出版社、1998年8月第1版、576頁。

中日传统地方曲艺的生存困境之调查报告

华东师范大学 兰 晓敏

各国优秀的传统地方曲艺在保护非物质文化遗产的大语境中得到了相当程度的关注与重视。但是，由于社会的发展和人们生活方式的改变，使得我们在保护非物质文化遗产的工作中遇到了许多难以想象的困难和阻力。

非物质文化遗产是古老的传统文化，更是民族文化的精髓，它就像一条历史长河，从古流至今。河流中的每一种鱼代表一种独特的文化，缩小到曲艺范畴，便是每一种鱼儿代表一种传统地方曲艺，它们经历了长期地发展、衍变。而如今自然环境和生态环境都已变化，有的地方河水被污染，有的地方河水干涸，有的地方河水截流，有些地方河水被改造利用，那么生活在河水里的鱼儿将会面临怎样的命运？

有的鱼儿紧紧跟随时代的脚步，通过不断地改变自身形态来迎合社会，在新的环境中不断壮大，使自己仍占有一席之地；有的鱼儿跟时代发展并不同步，甚至在城镇化的进程中适应缓慢，正在面临着生存的危机；还有一些鱼儿完全与社会格格不入，被时代所淘汰，即将或已经消失。

以上的鱼儿理论恰恰生动地反应出如今传统地方曲艺的生存困境。中国是一个曲艺大国，各地广泛分布，不仅历史悠久、剧种繁多，而且群众基础深厚，艺术价值亦高。许多曾经反响热烈的地方曲艺如今日渐萧条，渐渐淡出民众视野。笔者通过田野调查发现，被评为首个“中国曲艺名城”的山西省长治市的传统地方曲艺也面临着种种生存危机，就以进入非遗名录并代表当地特色的襄垣鼓书为例：

襄垣鼓书诞生于明末清初，是山西省一个较大的地方曲种，至今已有300多年的历史¹⁾。襄垣县地方曲艺有鼓儿词、小板书、八角鼓，旧社会说唱艺人多为盲人和半盲人，说书者多会卜卦，是“三皇会”成员，信奉“三皇圣

母”。每年农历五月初五，召开皇会，说书比艺，全力竞唱力求技艺超人。新中国建立后，盲艺人在演唱形式和唱腔上进行了改革，曲牌比过去大为丰富，演技大为提高。一人掌握小鼓、钹、小锣、大锣、梆、板等7件乐器操作自如²⁾。早期的鼓儿词演出是以矮木架支书鼓，演唱者操挎板、鼓箭击节，另一人操老胡或二胡伴奏。剧本分为长篇、中篇、小段。襄垣鼓书的表演与民众生活相关，一般会在庙会举办，或者当地村民家里办寿、满月、婚丧、暖房也会请鼓书艺人进行表演。

2009年，襄垣鼓书被编入国家非物质文化遗产名录，它独特的艺术表现风格，不仅是山西传统地方曲艺的代表，更是打出了中国鼓书说唱的品牌。襄垣鼓书的独特魅力主要表现在以下五个方面：

一、表演艺人中的特殊群体：盲人或半盲人

襄垣鼓书的表演艺人主要是盲人或半盲人，他们生活不能自理，靠卖艺为生，唯一被评为国家级的襄垣鼓书传承人王俊川老人便是一位盲人，如今被任命为襄垣鼓书曲艺队的队长李杞也是盲人。因为盲人表演的缘故，观看者除了欣赏传统曲艺，或许更是被他们身上传达出的积极乐观精神打动。

二、表演艺人入门的绝活：卜卦

襄垣鼓书的艺人首先学会的便是卜卦，身份相当于现在的算命先生，后来为了随时可以有饭吃，有地方住，才开始学习说唱表演。襄垣鼓书传承艺人如果学习三年可以出师的话，起码要用一年的时间来学习卜卦。



三、表演艺人的民间信仰身份：三皇会成员

襄垣鼓书的表演艺人有自己的信仰，他们是“三皇会”的成员，信奉“三皇圣母”，三皇即天皇轩辕、地皇神农、人皇伏羲，圣母即女娲。每年农历五月初五，召开皇会，艺人切磋技艺。

四、表演艺人的高超技艺：一人手脚并用操作七种乐器

表演形式自拉自打自唱，一人兼用七种乐器，小鼓、钹、小锣、大锣、梆、板等，两只脚都绑着鼓锤，手脚并用，同时演奏。

五、莺歌柳的烟花柳巷情结

襄垣鼓书中的莺歌柳兴盛于清雍正年间，融合民间妓院柳巷青歌及当地民歌小调，很早以前是妓女唱给嫖客听的，后来挣不上钱的时候，会去外面演唱，男人学会便成了说书，腔调是莺歌柳。

而如此具有独特风格的传统地方曲艺，如今的表演艺人却不足30人，收入甚微使得许多年轻人不愿意学习传统曲艺，笔者对襄垣鼓书的艺人进行调查，有一对曲艺队的夫妻都不愿意让自己的盲人儿子学习他们的技艺。如今学员青黄不接是襄垣鼓书面临的最大问题。田野调查过程中，笔者有幸到当地大黑沟观看一场鼓书表演，从观众群体来看，主要还是老年人。这也体现出，襄垣鼓书发展至今，或许不再适应现代人的艺术审美接受，才会失去大量的民众支持。

日本的传统地方曲艺也有自己的独特风格，与中国的襄垣鼓书最为相近的曲艺类型应该是安城三河万岁，这种曲艺类型也是国家指定的重要无形民俗文化财产。三河万岁有神道三河万岁、三河御殿万岁、三曲万岁。笔者在安城市历史博物馆里通过影音图像资料便看到了三河御殿万岁，舞台背景以松树为主，表演形式是中间一位主唱手里拿着扇子，左右各三位伴唱表演者手里均拿着鼓，有说有唱，动作整齐且有节奏感。

日本的琵琶表演也是别具风格，有单人自弹自唱；有两人合作，一人弹奏琵琶，一人伴舞；还有三人同台表演，一人弹奏古筝，一人弹奏琵琶，一人在场中进行舞蹈表演。日本艺人弹奏琵琶与中国有所不同，他们不是用手指弹奏，而是用一个三角形的木板代替手指弹奏。

笔者在日本调研过的浅草演艺馆，主要有落语、相扑漫谈、讲谈、漫才、俗曲、歌谣漫谈等多种表演形式，他们大多表演的时候，表情丰富、动作夸张，主要是以娱乐为主，逗观众一笑。基本上都是一个人进行表演，落语主要以说为主；俗曲里既有说唱，又有舞蹈表演；漫谈是表演者穿着西装站在台上讲述；讲谈是在表演者前面放一张不

高不大的桌子，讲到关键时刻就会用小木条敲打桌子，吸引观众的注意力。

日本的传统曲艺也是形式多样，内容丰富。笔者到横滨三溪园琵琶表演会、东京国立能乐堂、浅草演艺馆等传统曲艺的表演场所调查，同样发现前来观看的群众也是星星点点，而且年龄偏长者居多，这说明在日本这些传统曲艺也并未受到太多年轻人的关注与喜爱。可见，中国传统地方曲艺面临的窘境在日本同样存在。

由此可知，无论是在中国还是在日本，传统曲艺在当代时代的发展前景并不乐观，传承人老年化严重、招收不到学员、群众基础薄弱等问题让这些曾经深刻影响我们生活的宝贵的非物质文化遗产继续传承下去并非易事。

对于传统曲艺的保护，我们应当增强保护意识，重塑民族之魂。民众是传统文化的表现载体，传统文化同时也起到了塑造的作用，异彩纷呈的传统文化活动是通过人呈现出来的。而如今随着城镇化的发展，对人的影响也极为深刻，甚至颠覆了依附在民众身上根的东西。不管是从社会层面、还是心理层面，民众的思想意识都深深影响着人的行为。

而各种传统曲艺都有其存在的文化空间，千差万别、种类繁多的曲艺文化不仅有深度，而且有广度，还有自身所带的各种不确定性。随着外在环境的改变它也在不断地发展变化，因此，我们还要用宏观与微观相结合的眼光去看待这些曲艺类的非物质文化遗产，这样才能使它们朝着更加鲜活的方向发展。

传统地方曲艺面临的种种困境已为我们敲响警钟，跟时间赛跑、跟生命赛跑、跟城镇化的进程赛跑应成为保护非物质文化遗产的首要口号。如果不进行抢救性的保护，或许它们就会悄无声息地从我们的生活中彻底消失，永不存在。因此，我们对曲艺类非物质文化遗产的保护，应该进行理性的思考，既要尊重它们发展的客观规律，又要想办法让这些珍贵的文化遗产鲜活的存在于我们的生活之中，能被我们永久的保护、传承下去。笔者认为，我们最应该做的应是尽最大的力量开始进行全面、系统地收集，真实地记录，把它们列入历史的画卷之中，让我们的子孙后代可以更加全面地了解过去民众的生存状态和生活方式，使它们成为我们真实、永恒的记忆。

[注]

- 1) 王德昌：《襄垣鼓书精品汇集》，政协襄垣县委员会文史委、襄垣县文化服务中心编印，序。
- 2) 山西省襄垣县志编纂委员会：《襄垣县志》，北京：海潮出版社，1998年8月第1版，第576页。

